



カントウータ

# Cantuta

No. 36



イリマニ山 (撮影者 椿 秀洋)

- 1 2018年8月ボリビア旅日記 (その2) ..... 渡邊 英樹
- 2 ボリビアの皆さんに感謝の気持ちを込めて ..... 森 妙子
- 3 ボリビアの木材ビジネス環境について ..... 古田 芳昭
- 4 じゃがいもの旅の物語 (連載 第25回) ..... 杉本 房子

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

## 1. 2018年8月ボリビア旅日記

### (その2)

日本ボリビア協会 相談役  
元海外移住事業団 ボリビア駐在  
渡邊 英樹

2018-08-11

#### 沖縄県民ボリビア移住 110 周年記念式典・前夜祭

朝 8 時、日本ボリビア協会のオスカル長嶺常務理事ご夫妻とホテルのロビーで合流して、祭典委員会が、指し回してくれたレクサスのセダンでコロニアに向けて出発。オスカルさんは、10 歳の時、第 1 次移民で来て、移民で初めてボリビアの大学を出てブラジル銀行に入学した秀才。

私は、オキナワ農牧総合組合(CAICO)設立時に、海外移住事業団サンタクルス支部の貸付責任者を兼務したまま、経営指導に当たるため CAICO に出向して農協の事務所に通っていたが、その時からの友人である。

CAICO 会長の宮城徳昌さん、専務理事兼総支配人の幸地広さんからは、「我々が移住地内のゴタゴタは責任を持って納めるから、どうかこの組合をボリビアで誇れる有数の経済団体に成長させて欲しい!」と言われて、再建策を実施して行く上で、事業団の融資枠ではとても足りない膨大な資金の調達のために、私がブラジル銀行を含めての現地金融機関を駆け回っていた頃である。

オスカルさんの義兄に当たる安仁屋晶さんには「渡邊さんのその下手なスペイン語で、よくもまあ、次々とお金を引き出してくるもんだ!」と呆れられていたが、繰綿プラントの輸入保証の取付、組合の運転資金ばかりでなく、移住者の皆さんの個々の農業機械購入の借入申請への同伴等々で足しげく通ったブラジル銀行のサンタクルス支店にオスカルさんが勤務されていたのである。2 時間半の道中、思い出話は限りなく、尽きない。約 100 キロの果てしなく続く平らな大地を走ってオキナワ文化センターに到着。私の姿を見つける

や、皆さん駆け寄って来て握手を求めてくれる。地球の真裏の地に無条件で歓迎される場所がある幸せを改めて噛みしめる。

移民資料館の前には 14 年前の入植 50 周年祭の時に植樹した樹が自分の背丈より高く立派に育っていた。資料館に入ったら、金秀グループ会長兼喜瀬カントリークラブ理事長で、ペルー名誉領事でもある呉屋ご夫妻とバッタリ遭遇。「渡邊さんの写真を見て来たよ!」と言われる。私も資料館の中の歴史写真の一部になるのか?と複雑な思い。

かつて私が尊敬もし、親交のあった友人のお孫さん同士が結婚した幸地家と安仁屋家。我が事のように嬉しくて、今回の訪問はそのお祝いも兼ねていた。そのお嫁さんの安仁屋進さんのお孫さんに当たるサヤカさんがお昼に招いてくれると言って迎えに来てくれる。

「ぜひ泊まって欲しい」とのお招きも頂いたが、皆さん祭典の役回りがあり精一杯動かされているはずで、それは辞退させて頂いた。サヤカさんとは、彼女が JICA の研修で、一昨年、東京農大で勉強されていた折に、叔父に当たるオスカルさんと私を訪ねて来てくれて、一緒に食事もしているので、旧知の間柄である。食の世界遺産になった和食の最高峰である懐石料理を味わって欲しいと思いご一緒したが、こちらの方がうれしくなるほど、感激されて、一品、一品を写真に収めて、毛筆のおしながきと共に持ち帰られた。



写真 1-1 新婚夫妻と新郎の父・幸地誠さんとともに

黄色と紫のタヒーボの花満開の敷地内の通路を  
通って幸地邸へ。お昼にオキナワそばと海苔巻寿  
司をいただく。ヤギの刺身を初めていただいたが、  
醤油味と味噌味双方共に酸味を効かせて浸けてあ  
り絶品！酒の肴にもってこいの感じであった。  
幸地家は1400ヘクタールを所有。その内の600  
ヘクタールは米作で、その農機具と乾燥施設を見  
せてもらう。米は値の良い時に販売する為に乾燥  
装置を作ったとのこと。その機械の巨大さに圧倒  
される。「もう銀行融資に頼らなくて良い状態に  
なったのですか？」という質問に二代目の幸地誠  
さんはにっこり肯かれる。

実は、コロニアオキナワの起死回生の再建策の  
過程で、かつて私は、1年間で一気に4000ヘクタ  
ール余の機械化耕地の造成とトラクター900台の  
導入の旗振りをしたために、膨大な債務をコロニ  
アの皆さんに負わせた張本人として糾弾されたこ  
とがあった。現地公館からも「好ましからざる人  
物」と烙印を押されてしまった。その事に触れる  
と幸地さんに「あれがなかったら今日はなかった。  
渡邊さんのことは、父からよく聞かされていまし  
た」と言って頂き、ホッとした気持ちになる。そ  
の後も、お会いしたほとんどの方から「あの時が  
なかったら今日はなかったですよ」と過分なお声  
掛けを頂き、ずっと心の中に引っかかっていた棘  
が抜けていく感じであった。一気の機械化耕地の  
造成が、その後の小麦や大豆栽培等への転換をす  
ばやく容易にして、今日の繁栄の源となったとい  
うのである。

あの時は膨大な債務と思った各農家の2~3万  
ドルの債務は、今のコロニアにとっては何ともな  
い額になっている。CAICOの今年の貸付予算が  
1000万ドル、一戸あたりの組合員への貸付限度額  
が30万ドルというのである。ちなみに、私が、1969  
年の着任時のサンタクルス支部の貸付予算額は、  
サンファンとオキナワの両移住地の組合と個人へ  
の貸付を合わせて日本円の3000万円、1ドル300  
円になった頃であるから10万ドルであった。

日本からの貸付予算は、生活保護費程度のもので、  
現地金融機関を利用しない限り何も出来なかった  
のである。コロニアオキナワの経済規模は、今は、  
もう、自分の想像を絶する規模になっているので  
ある。幸地さんの米収穫用コンバインや農業機械  
の合計は、優に300万ドルは超すと思われた。



写真1-2 タイヤが肩の高さ位あるコンバイン

14時からの慰霊祭に出席。沖縄県、議員連盟、  
沖縄全市町村の献花が両側に見事に飾られた中を  
名前を読み上げられて進み、御焼香。この式典を  
沖縄県の全市町村が支援しているということが、  
どれだけコロニアの皆さんを勇気づけるか？と思  
う。この交流こそがエネルギーの源となるはずで  
ある。

続く豊年祭はボリビアの様々な民族舞踊がエイ  
サー踊りと共に披露される華やかなものである。  
招待客は道の両脇に設けられた立派な観覧席から  
の見物である。



写真1-3 二度目のボリビア勤務の時に住んだ家



我々は、遅くなるので直ぐにサンタクルスへの帰路につく。サンタクルスではちょっと寄り道して二度目のボリビアの時に最初に住んだ家を探しに行く。娘が目印の公園からの位置関係を的確に覚えていて、行って見るとそのままの形の家が玄関のリフォームと配色以外は変わらずにそのままの姿であった。二人の子供はここからアメリカンスクールの小学校に通った。

2018・08・12

式典当日

7:30 にホテルを出発。9:15 にコロニアオキナワ第一に到着し、記念式典会場へ。



写真1-4 記念式典の会場



写真1-5 比嘉姉妹と筆者の長女

旧知の人々が、駆け寄ってきてくださる。娘の春奈にはカフェ東京の比嘉エリカさんとその妹さんが駆け寄ってくる！幼少期にサンタクルスの日

本人会で共に着物を着て踊った仲なので、38年間のブランクを感じさせない友達会話をしている。



写真1-6 根間夫妻と筆者

本年、日本国から叙勲された根間弁護士と再会。CAICOの設立時の定款は、当時レネモレーノ大学の法学部に通っていた根間氏と私の合作という間柄である。ちなみに、CAICOは根間氏の命名である。さっそく15日夜のご自宅での夕食の招待を受ける。公認会計士をしているエリカさんの妹さん夫妻も招待して、私の好物のパット(アヒル)料理を用意してくれるという。嬉しい限りである。

式典後の昼食会は圧巻であった。

1200人の招待客が全て円卓テーブルを囲む光景は壮観。食器もナイフとフォークも使い捨てでないちゃんとしたもので料理も全部自分達で調理したものと言う。移住地全員老いも若きも1週間位総出であったとは45年の長きに渡り交流のある渡久地さんの弁。娘の春奈が5歳の時、初美さんに連れられて一週間位泊まりに行った渡久地家の前で踊っている45年前の写真を渡す。

会食では呉屋ペルー名誉領事ご夫妻、大城琉球大学学長と同席で話しが弾む。ここでは琉球文化とボリビアの先住民文化が衝突し、互いに刺激しあい融合を試みながら新しい文化が形成されつつある。文化人類学的にも研究の対象になり得ると話し合う。



写真1-7 式典後の豪華な食事会

帰路の途中にある移住地の釣りクラブで、沖縄県庁、那覇市関係者、ペルーオキナワ県人会の方々と歓談。昔、水害に遭われ、移住地を離れて、モンテロで食堂を営んでいる83歳の女性の話に聞き入る。オキナワのオバアは、そんな苦労話の中にもユーモアを忘れない。そして、「日本人がこれを始めた」という実績をその町に残そうとしている逞しさに、「これがオキナワのオバアの真骨頂!」と感じ入る。

ワカメの味噌汁でホッとした気持ちになって、釣りクラブが夕陽に染まるのを眺めてサンタクルスへ戻る。

20:30 ホテル着。

(つづく)



写真1-8 移住地・釣りクラブからの素晴らしい夕陽の眺め

## 2. ボリビアの皆さんに

### 感謝の気持ちを込めて

元日系社会日本語シニアボランティア

森 妙子

#### ボリビアでの日本語ボランティアの経験

私は、日系社会日本語教育担当のシニア・ボランティアとして、2008年6月から2010年6月まで2年間ボリビアへ派遣されました。帰国後の今、思い返す度、逆にたくさんのことを学ばせていただき、ボリビアの皆さんに大変お世話になったという感謝の気持ちでいっぱいになりました。



写真2-1 読み聞かせの授業 (オキナワ第一日ボ校)

オキナワ第一日ボ校、同第二ヌエバ・エスペランサ校、コレヒオ・サンファン校、サンタクルス日本語普及校を主な活動場所としたほか、ラパスにある日本語学校も訪問しました。日本でいう教育委員会の指導主事のような役割で、ちょっと煙たがられるようなことをしておりました。授業を見せていただき、感心しながらも、時に新たな教育の考え方や授業の進め方についてアドバイスをさせていただきました。そしてどの学校も異国にありながら、先生方は日本と日本語のことをよく研究され、児童・生徒のことを中心に考え、熱心に教材研究をし、指導にあたられていたことに感心しました。

学校だけでなく、オキナワ第一移住地では、病院に宿泊し、いろいろな方々に声をかけていただきました。オキナワ舞踊の名手にご指導をお願いし、大きな舞台でJICAの仲間と沖縄民謡を踊らせていた



だいたいの良い思い出です。歴史資料館では移住の歴史を学び、一世の皆さんの途轍もない苦勞に想いを馳せました。



写真2-2 授業風景エプロンシアター  
(又エバ・エスペランザ校幼稚園)

オキナワ第二移住地では、夕食時に近所の網戸付きの食堂で、地域のお父さんたちも一緒に集って下さって、ビールを飲みながらいろいろな話を聞かせてもらいました。特に昔のことや子供時代の体験、日本へ出稼ぎに行った時の話などは、興味深く、また驚くことばかりでした。

サンファン移住地では、最初の出会いが地域の運動会・文化祭でした。運動会は最初から最後まで走りに走って、若いも若きも健在ぶりを発揮していたのに驚かされました。盆踊りや敬老会然り。



写真2-3 成人式を祝って日本舞踊 (サンファン校)



写真2-4 手作り鯉のぼりの下で4校合同運動会—皆のきずなが最高の宝— (又エバ校会場)

日本舞踊の発表会は舞台装置から衣装まで手作りで、出来上がりはまるで新宿にあるコマ劇場のようでした。

サンタクルスでは、シニアの皆さんの集まりに参加。オカリナの伴奏をして懐かしい童謡を歌って楽しんでもらいました。盆踊りのPRのためにテレビ局で生放送用の収録に参加し、初体験をさせていただいたのもとても楽しかったです。



写真2-5 運動会の華 エーサーとシーサーの競演 (又エバ校)

どちらの地域でも日本より遥かに日本文化を大切にしていたことに敬服しました。そして、その地域が一番大切にしているのが移住地にある学校でした。先生たちは日本に行ったことのない人も含め、日本語や日本の生活習慣・文化などを理解し、児童や生徒たちに伝え、次の次代を担う若者を育てている姿に感動しました。「国づくりは 人づくり

から」という言葉があるように、移住地の未来は地域の皆様と共にある学校から発信し、作られていると感じました。



写真2-6 母の日のイベントでの子供たちのダンス  
(コレヒオ・サンファン校)



写真2-7 感謝！校長先生の手作り料理で送別会  
(サンタクルス校)



写真2-8 日本語教師会の役員さんたちと  
(サンタクルス学生寮前)

## 帰国してからの講演活動

JICAでの事前研修開始直前までタイの2つの大学でボランティア活動をしていましたが、私がボリビアへ行く話をすると、「アフリカは危ないから止めた方がいい。」と言われ、日本の親戚・友人知人に話しても「その国はどこにあるの？」と言われることが度々で、南米にあることを知っている人は僅かでした。

そこで、帰国してからは、ボリビアの皆さんへの感謝の気持ちを込めて、ボリビアのこと日系人のことをより多くの皆さんに知ってもらいたい、その為のお役に立とうと決意し、学校からの授業や各種団体から講演依頼があると、断ることなく一つ返事でOKしています。

最初は まず、私も住む川崎市麻生区文化センターでの講演でした。麻生区は川崎市の中でもく文化の街 麻生、芸術の街、麻生>と謳われる地域です。どの位の聴衆が集まってくれるか気になりましたが、実際100名近くの人達が関心をもって集まってくれました。終了後たくさんの温かい感想をいただき、見知らぬ方から毛筆の達筆なお手紙も受取るなど有難いスタートを切りました。

JICAからの依頼で遠隔地の千葉県の会場では、この日は大雨波浪警報の出た日で、聴衆は殆どいないのではと思いながら出かけたのですが、何と20名近くの方々が待っていて下さり驚きました。

鎌倉では生涯学習でシニア対象の講座でした。熱心な方々の視線に応えつつ、ボリビアの話を中心にしながらも、シニア世代のボランティア活動、それから幼児用の月刊誌にもボランティアという言葉が登場してきていることをお話しました。

個人のお宅での直に向き合っのお話し会や、アフリカに関心のある方々の少人数の集いでも話をさせていただきました。

高校では、学校の要望に合わせ、多少内容を変更したり、重点の置き方を変えたりすることもあります。大体似たような内容で生徒さんは理解を深めてくれました。



主な内容としては、

- ① ボリビア多民族国の今を伝えながら、任務で訪問した移住地の学校と私の仕事の紹介。
- ② 戦前の日本人の移住の歴史と、第二次大戦時の日本人日系人のおかれた厳しい状況。そして、そんな中でもボリビア社会のために行ってきた慈善事業など。
- ③ 第二次大戦後のオキナワやサンファンへの移住。開拓者の苦難の歴史。そんな苦しい中にあっても子どもたちへの教育を大事にしてきたこと。
- ④ 現在の発展した移住地の様子や、そこまで築き上げてきた組織力や団結力。
- ⑤ 日本人や日系人の活躍とボリビアに於ける高い評価。  
誠実、真面目、謙虚、強い忍耐力、責任感、規律を守る、約束を守る、などなど

小学校での授業が多かったのですが、各学年ごとにねらいは様々でした。総合学習の時間や生活科、低学年の道徳の時間では、人権教育に視点をおいた授業などいろいろでしたが、どれも上記に記したようなことを核にしながらか展開しました。構成もねらいに合わせて、そのたびにパワーポイントを作り直しました。



写真2-9 講演会「知られざる日系人の軌跡」

(川崎市麻生文化センター)

最初のころは、在日ボリビア大使館が今までに見たこともないような大きな国旗を貸して下さった

ので、児童の好奇心は一気に高まり、中心にある紋章からボリビア国について想像を膨らませながら楽しく学習がスタートしました。授業終了後は、早速習ったばかりのスペイン語で挨拶しに來たり、ボリビアへ行ってみたい、ボランティアをやってみようと思う、とか、また、日本人ってすごいね、等々感想を伝えに來たり、子どもたちの反応はとても素直で、今まで全く知らなかったボリビアに大いに関心をもってくれたようでした。

このように任地で、佐藤事務局長さんはじめ、多くの方々に教えていただいたこと、本や資料館で学んだこと、自分の目や耳で実際に見聞きしたこと、現地の方々から得た情報などをもとに話をして來ました。そんな中で、私が特に印象的だったことは、最後のまとめで伝えましたが、ボリビアの日本人や日系人への評価が非常に高かったことについてでした。「日本が橋を作ってくれた。」「病院を作ってくれた。」「飛行場を作ってくれた。」「仕事のやり方を教わった。」そして「もっと大勢来てくれないかな。」等など、ボリビア人は私が日本人とわかるとすぐ感謝の言葉を伝えてくれました。「妙子、大好き」と言ってくれる人もいましたが、これは日本人や日系人が大好きということだと有難く受け止めました。

本年2019年は日本人ボリビア移住120周年とのこと、誠にありがとうございます。この稿を書くにあたって私がボリビアを訪問した10年前の110周年の際に接した移住の歴史や、移住地の皆さんの様子や将来への夢や希望を、その時撮った映像などを通して振り返り、改めて思い出すことができました。またまた感動です。

私にとって、ボリビアでの2年間は、日本と日本人を改めて見直す良い機会となりました。

これからも機会があるたびに感謝の気持ちを込めてボリビアをPRする『歩く広告塔』として頑張らせていただきます。

(終わり)



### 3. ボリビアの木材ビジネス環境について

サンタクルス SUTO LTD.

代表

古田 芳昭

私は、1975年にボリビア多民族国家のサンタクルス県庁が造成した工業団地に、パイオニアとして一番先に設立され、稼働した北三株式会社（ほくさん:本社:東京 新木場）の子会社SUTO LTDAに勤務して44年になります。

我が社は業種としては木材業で、主な営業品目は突板（つきいた）です。突板（つきいた）とは、木材を厚み0.2mmの紙の様に薄く切削し、合板等に接着され化粧材として使用されるもので、家具や、ホテル・劇場の壁などの装飾材、車の内装材などに使われます。最近ではJR九州の観光列車七ツ星の内装にも使用されている「戸板材」の製造・販売を行っている会社です。

ボリビア多民族国家での木材ビジネスをめぐる環境について一筆書かせて頂きたいと思います。ボリビア多民族国家の木材事情ですが、植林された樹種としては、成長が早く柔らかい木で合板用の材料となるセレボ、鉱山の落盤防止に使用する杭木用のユーカリ、チーク材なども多少はありますが、まだまだ小規模で合板向けの需要量を満たすには足りないため、現状では自然林からの供給が主となっています。

当国では、大手合板メーカー及び製材会社の数社が、政府から伐採権を取得しており、我が社もその中の1社で、約50,000ヘクタールの伐採権を保有しています。当国の森林法は、自然更新しながら持続可能な森林利用と森林保護を進めることを目的にしており、伐採権の総面積の5%が年間伐採量として許可されます。この結果、20年で1回りとなり、その後、再び1回目と同じ条件で伐採が出来ることとなります。



写真3-1 モラードの立木

政府から伐採許可を取得するには、調査した立木の20%を「種木」として残し、胸高直径40cm以下は伐採禁止というルールのもとに埋木調査を行います。立木のある場所をGPSで測定して地図を作成し、その他必要書類とともに伐採許可申請書に添付して審査を受けなければなりません。そのため、申請してから許可を取得するまでには相当な時間、人と経費が掛かります。



写真3-2 埋木調査でGPSによる立木の位置測定の様子



写真3-3 作成された立木の地図

ビジネス上の採算としては、ボリビア政府の政策により毎年上がる賃金等の固定費の増加とともに、埋木調査費が加わり、年々コスト高になっています。ボリビア国内の市場は規模が小さいながら、建築用材、合板等の需要はありますが、当国では為替レートが米ドルにペッグされて固定されている一方、近隣諸国の通貨（特にブラジル通貨・レアル）が安くなっていることもあって、安い輸入品が市場に出回っており、大手合板会社は販売に苦勞しています。大手合板会社や、製材会社がメンバーになっている商工会議所木材部 CFB(Camara Forestal de Bolivia)が地元産業の保護を求め、合板等を含めた木材製品の輸入税の引き上げを政府に陳情していますが、いまだに実現していません。木材を輸入するためには、運搬許可書が必要ですが、最近森林局はその発行料金を、700BS から 11,000BS に大幅に値上げしました。但し、それだけでは国内製品が輸入品と競争出来るかは不明で、今後注視する必要があると思われれます。

このような国内事情のためボリビアの合板会社は輸出に力を入れ始めています。輸出先は、米国、ヨーロッパ、日本、中国などですが、この他では最近特にキューバ向けが増えています。キューバ

は政府の観光に力を入れる方針の許、全土でホテルの建設ラッシュになっており、木材の需要が激増しています。また、ベトナムでは 家具の中国への輸出が増加しているため生産が著しく増えて木材の需要が激増しており、これらを受けて、ボリビアからキューバとベトナムへの輸出が急増しているのが現状です。



写真3-4 切削された突板

世界的な木材資源の枯渇問題と共に各産出国での規制が厳しくなる現状を考慮すると、ボリビアは厳しい森林法により計画伐採をしているため、まだ世界的にあまり知られていない樹種があります。世界的な木材不足が予想される現在、絶好のチャンスと思われるので、この世界的に未開発の樹種の PR プロモーションを積極的に行う必要があると考えています。

(終わり)

#### 4. じゃがいもの旅の物語（連載 第25回）

旅行作家

杉田 房子

トウモロコシは、じゃがいもとともにカリブの島々ではない南米大陸の本土を生まれ故郷とする。これ



が「マラバル地方でよく栽培されている」のだとすると、同じ頃にスペインのセビリヤで栽培がはじまったじゃがいもと競いあうほど、伝わるのは早かったことになる。

それほど早く伝えたのは、ヨーロッパから半年がかりの東方航路が食料に苦しむ日々の連続のようなもので、アフリカの喜望峰をまわる前後のセントヘレナ湾でたっぷり食事をとるのがわずかな楽しみだった船乗り以外にいるだろうか。16世紀にセントヘレナ湾で休んだ船が「羊か牛の焼き肉、その脂で揚げたじゃがいも」を食べて、「食後に煙草」を楽しんでいた記録を残していたとすれば、南米生まれのトウモロコシはもちろん、じゃがいもも煙草もインド亜大陸の土と日焼けした浅黒い肌のインド人を知っていないはずはなかった。

サツマイモとトウモロコシの形、味、育ち方などを詳しく記録しているリンスホーテンも、ヨーロッパ本土がじゃがいもで凶作や飢饉から救われ始めているのをあるいは知らなかったかもしれない。しかし、スペインとポルトガルに遅れじと、イギリス、フランスがアジアに向かうのに続いたオランダ人は、彼の記録を注意深く読んで、長い航海の準備に生かそうとしていた。

東方航路を開拓したポルトガルが、手探りさながらにじりじりと東に向かったあとを、他のヨーロッパ諸国は一足飛びに進んだ。それに、1580年にはポルトガルがスペインに併合され、そのスペインから1581年にオランダが独立し、1588年にはイギリスもスペインの無敵艦隊を壊滅させるという各国の力関係の変化も、ポルトガルだけの東方進出を許さなかった。

アラビア海沿いのマラバル地方からベンガル湾に面したインド東部地方とマレー半島まで、ポルトガル船がようやくわが物顔に往来しだした頃、イギリスとフランスはもうアフリカ大陸のインド洋海岸まで迫っていた。オランダはインド洋を突っ切って、南アジアの島々に直接行き着こうとしていた。スペインは東方はるかの世界から太平洋を越え

て、アジアに近づこうとしていた。

「セイロン（スリランカ）では、ダイヤ、エメラルド、トルコ玉以外の宝石がなんでもとれる」

「ベンガラ（ベンガル）からペグー（ビルマ）にかけては、米が驚くほど実る。じゃ香、安息香などの香料からニンニク、カラシなどの調味料が市場にあふれている」

「人々は穏やかだが誇り高く、罪を許さない、罪人は断首した上、柱に刺される。女はおしゃれ好きで、男との交際は自由」

1511年頃のベンガルの様子を、ピレスはこう記している。九月から十一月まで西風か北西風が吹くベンガル湾を、こうした人と物を乗せたインドの船がマレー半島やスマトラ、ジャワに向かう。船は、十二月から四月にかけて逆に吹く北東風か東風に乗る、絹や香辛料や金銀を積んで帰ってくる。

一年に二度、インドのベンガル湾は賑わったことになるが、マレーのマラッカ海峡は西からはそうしたインド船で、東からは遠くキタイ（中国）はもちろんレケオ（琉球）からさえ来る船で、一年を通じて出入りが絶えない。それは「世界は四大港の取引で成り立つ」中で最も東にある大きな港にふさわしい活気だった。何しろ、ここで初めてポルトガル人は琉球の名を耳にし、琉球人を現に見たのだった。

ポルトガルがマラッカを占領したのは1511年で、インドのゴア同様に要塞を築き、貨幣を発行し、1641年まで百三十年間にわたって支配する。終止符を打ったのは、ジャワを根拠地としていたオランダだった。イギリスとフランスに妨げられて、ヨーロッパ本国はもちろんインドからの援軍も得られなくなっていたポルトガルと違って、オランダは1596年にインド洋を横断して以来、ジャワ島と直接に結びついていた。ハウトマン指揮のオランダ船四隻が、ジャワ西端のバンテンに着いたのはその年の六月のこと。喜望峰をまわってから二か月、固パンとじゃがいもを食べつないでの直行航海だった。

（つづく）

## ボリビア関係刊行物の頒布幹旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9  
『100 años de historia de la inmigración japonesa en Bolivia』を原典として 2012 年までを追補 在庫多数
- ② 『大地に生きる沖縄移民』2005-12 コロニア・オキナワ入植 50 周年記念誌、在庫 1 冊
- ③ 『ラパス日本人会 90 年の記録 1922-2012』 2012-10 在庫 1 冊
- ④ 『ボリビアを知るための 73 章』(第 2 版) 2013・2 明石書店刊行

上記は、①-③とも統一価格 2500 円、  
④は 2000 円 (いずれも税・送料込)  
ご注文は下記の当協会までメール又は電話でお名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡ください。

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org) 042-673-3133

お支払は振込でお願い致します。

(口座番号・名義人は発送時ご連絡致します)

## 協会関係活動の近況

日本人ボリビア移住 120 周年記念関係

- ① 5 月 3 日～5 日

### 2019 Festival de Camino a Latinoamerica

(台場・ウエストプロムナード)

(日本ラテンアメリカ文化交流協会主催・日本ボリビア協会後援) 椿会長が挨拶、役員会員多数参加

- ② 5 月 11・12・14・16・18 日

### Kjarkas 来日公演

(蒲郡・松田町・東京、神田・練馬・江東)

(日本ラテンアメリカ文化交流協会主催)

役員会員多数参加

- ③ 5 月 28 日

日本ボリビア協会 2019 年度第 1 回理事会・

定時総会(東京/内幸町・米州開発銀行会議室)

## 協会活動今後の予定

7 月 17 日 日本人ボリビア移住 120 周年記念式典 (ボリビア・サンタクルス市、ホテルタヒーボ) (日本人ボリビア移住 120 周年記念式典実行委員会主催) 眞子内親王殿下ご臨席、椿会長/首席随員、杉浦専務理事/当協会代表として参加

### 8 月 9 日 ボリビア映画会

上映作品は、昨年好評を頂いたボリビアのウカマウ集団制作の「鳥の歌」(この映画の日本への紹介者である太田昌国さんの解説付き)

日時: 2019 年 8 月 9 日 (金曜日) 18:30 pm～20:55pm

会場: 東京・西麻布・ラテンアメリカサロン [在日ボリビア大使館のあるビル 8 階]

会費: 会員 500 円、一般 1000 円 (飲み物・軽食付き)

申込締切: 先着 30 名

※詳細は当協会 HP でご覧ください。

## 編集後記

カントウータ 36 号をお届けいたします。

それぞれの分野でご活躍の 3 名の寄稿者の皆様には厚く御礼申し上げます。

これから梅雨を経て夏に入ります。皆様のご健勝とご活躍をお祈り致します。

尚、本協会会報誌『カントウータ』の表紙写真(ボリビアの自然、建物、動物など何でも)を募集いたします。奮ってお寄せください。

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org) (細萱) まで。

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

Copyright© 2002-2019

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)